
やってきたもの

こめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やつてきたもの

【著者名】

N1256C

【作者名】

こめ

【あらすじ】

休みの日に、押し売りが家にやつてきた。白髪白髭の痩せた老人。その老人が売りつけようとしたものとは……？そして、予想外の結末が……。

(前書き)

お気軽に評価してください。

休日である。日曜祝祭日ではない。いわゆる会社の定休日だ。
本来なら、昼過ぎまで寝ているはずである。しかし、こんな日に
かぎつて朝っぱらから訪問者がある。

前日に酒を飲み、そのまま玄関のすぐそばに位置する応接間で睡
眠を取つていたのもいけなかつた。チャイムの音がうるさく、目を
覚まさざるを得ない。無視することも不可能。敵はしつこい。ピン
ローン、ピンローンと聞こえてくるたびに腹が立つ。

そのうえ、間の悪いことに妻は子供の授業参観へ出掛けっていて不
在だ。俺が応対するより他にしかたない。

眠い目をこすりながら起き上がり、玄関へと向かう。

ドアを開けると白髪白髭の瘦せた老人が突つ立つっていた。片腕には唐草模様の風呂敷包み。

老人は俺と目が合つたとたん、にこやかな笑みを浮かべ揉み手を
始める。あきらかに、押し売りだ。

「うちは、押し売りお断りなんですよ。門にもその旨の札を出して
いるじゃありませんか」俺はふたたび玄関のドアを閉めにかかつた。
「ちょっと、待ってくだされ」老人は慌てて、顔を近づけながら言
つてくる。

しかし、待つわけがないのである。俺はそんなお人好しじゃない。
そのまま腕を引いていく。

「あれつ」あともう少しといつたところでドアが動かなくなつた。
下を見ると、老人の爪先が挟まつている。ぜつたに、ワザとであ
る。「じいさん、足をどけてくれないかなあ

「嫌じや」老人はキッパリと撥ね付けた。「なにがあつても引き下
がれん。そんなことしたら、日本男児の恥じや

「わけの分からぬことを言わないでくれよ」俺は渋面を作つて見
せた。老人への当て付けである。「押し売りなんかする方が、よつ

ほど恥じやないか」

ノブを掴んだまましゃがみ込み、老人の爪先に手をやつた。えい
つ、と押してみる。

ビクともしない。枯れ木のような体のどこにそんな力があるのだ
うづ。

見上げると老人は仁王立ちしていた。

「年寄りだと思つて舐めたらいかんぞ」高笑いする。「わはははは
つ」

俺はちつと舌打ちした。いつしゅんこの老人をぶん殴つてやるう
かとも思つたが、さすがにそこまでは出来ない。いくら押し売りと
はいえ、殴つてしまえば傷害罪だ。捕まつてしまつ。

「じいさん素直に帰つてくれよ」俺は怒りの発作を押さえつけ、穩
やかな口調で説きふせた。「うちは、何も購入する気はないんだか
らさ」

「まずは、話しだけでも聞いてくだされ」すかさず老人は切り返す。
「それだけなら、いくらもかかるんじやろうに」

「金はかかるなくとも、時間のムダだ」俺も負けじと言い返す。
「氣持ちは変わらんよ」

「そうか。氣持ちは変わらんか」老人は念をおしてくれる。

「ああ、その通り」俺は頑とした態度を示した。「何度も同じことを言わせないでくれよ」

「うむ」老人は顎をさすり、つづいて天を仰いだ。

どうやら、諦めてくれたらしい。俺はホツと胸を撫でおろし
た。

次の瞬間である。

「うわあああん」とつぜん老人は泣き出し、その場に崩折れた。「
後生じや。後生じや」

ゴホゴホと咳込み、鼻をする。

泣き落としてある。その証拠に玄関の足はそのままだ。したたかなジジイである。

「たのむよ、じこさん」俺はホトホト困り果てた。「みつともないマネはよしてくれ」

「そんな殺生なことを言わず、せめて話しだけでも」老人は玄関枠とドアのわざかな隙間から手を入れて、俺の足首をつかんだ。「お願いじゃあ」

「そのヒマさえもないんだよ」嘘である。本当はやることなんて何もない。押し売りの相手をしたくないだけだ。俺はぶつきら棒に言い放つた。「他をあたってくれ」

「ああ、そのセリフはやめてくれ」皺深い老人の顔は涙と鼻水と汗でグショグショに濡れている。「方々で門前払いをされてきたんじゃ。それは、決まり文句じゃ」

「なら、うちもお断りといふことでいいじゃないか」

「よくない」強く頭を振って否定した。涙と鼻水と汗の混じり合った液体が左右に飛び散った。「それは、ぜつたいによくない」

「なんでだよ」俺はうんざりした。「他では断られても、うちは諦めないのかい」

「そのとおり」老人は固い決意のこもった眼差しを俺に向ける。「もう、なにもせんうちから諦めるわけにはいかん」

「無茶くちゃだ」俺はのけぞって、わめいた。「完全にそっちの都合じゃないか」

「たしかに、返す言葉もない」老人はガッククリとうなだれた。それでも足首をつかんだ手はそのままである。

「しかしじゃ、話を聞いてから判断してもよからう。そうすれば、おぬしの気は変わるはず」老人は勢いよく顔をあげる。「そして商品購入後も、ぜつために損はさせん」

「なんだかなあ」俺は上の空でつぶやいた。

「そもそも、馬鹿バカしくなってきたのである。せつかくの休日にこんな押し売りの老人を相手にする羽目にならうとは、夢にも思わなかつた。

老人はもうひと押しとばかりに言つてくれる。

「だから」地面に額をつけて土下座した。「この通り」

俺は「ふうううう」と、細長い溜め息をもらした。

老人を見下ろして、少しばかり考え込む。

この老人、おそらく七十は越えているはず。そんな歳になつてまで押し売りとは、よほど生活に困窮しているのだろうか。

しかし、仮にそうだとしても俺にこの老人を助ける義務はない。たしかに哀れな感じもしないではないが、それよりも胡散臭さの方が先に立つ。追っ払つてしまいたい。

だが、近所の目がある。この光景を目撃されるとバツの悪いことおびただしい。か弱い老人をイジメていると勘違いされかねない。

「分かつたよ、じいさん。顔をあげてくれないか」俺はやさしく老人に声をかけた。商品を購入する気になつたわけではない。話を聞いてから、追つ払う気になつたのだ。話しだけでもいいと言つたのは老人の方でないか。言質はとつてある。「さあ、早いとこ商品の説明なり何なりを済ませてくれ」

「おお、やつとその氣になつてくれたか」老人は一変して喜色をたたえ、立ち上がつた。

俺は玄関のドアを広く開けてやる。

「それではじやなあ」靴脱ぎ場へ足を踏み入れるやいなや、風呂敷包みをガサゴソとあさり始めた。

四角い箱を取り出し、俺に手渡す。「これじや

「なんですか、これは」俺は老人から受け取つた得体の知れない物をためつすがめつ眺めた。

「それはじやなあ」老人は誇らし気に言ひ。「『ゴキブリ取りじや』『ゴキブリ取り』心底あきれ返り、俺は二の句がつけなかつた。わざわざ平日の朝っぱらからこんなつまらない物を売り付けにくるとは、とんでもないジジイである。

老人はそんな俺の心中などまるで察していない様子で、微笑みを浮かべながら商品の説明を始める。

「そのゴキブリ取り、ただのゴキブリ取りとはわけが違う」俺の手

にある商品を指さした。「市販の物とは、比べるべくもない

「ふうん。こうして見るかぎり、何がどう違うのかサッパリ」と言
いかけた時、老人はくわつと手をむいて大声で怒鳴った。

「違う、ぜんぜん違う」

「ひつ」俺は体をびくつとさせた。「な、何がぜんぜん違うのです
か」

「それはわしが苦節十年の月日を費やし、作り上げた物なのじゃ」「
老人は薄汚れたジャケットの胸ポケットから名刺を抜き出し、オレ
の手に握らせる。「実はこのワシ、知る人とぞ知る世界的な発明家
なのじや」

俺は名刺に目を落とした。名前の上にはこれみよがしに発明
家の文字。（世界的な）、まで付いていやがる。

そうとうな用意周到さだ。信用を得るためにわざわざこんな名刺
まで作つておくとは。

ちょっとと考えればそんな偉い肩書きの人間が押し売りなんてする
わけがないと、バレそうなものなのに。

しかし、ここはもう老人に合わせておいた方がよい。非を打てば、
話しがこじれ長引くだけなのだ。

感心したフリをする。「いやあ、そんなお方だとはつゆ知らず、
もうしわけありません」

「かしこまらなくとも、よい。非礼はゆるす」老人はやにわに尊大
な口調となつた。「ワシのことを信じてもらえればな」

「信じます。信じますとも」俺は芝居掛つた調子で大きくうなづく。
「それにしてもこんな物、いや、そうじやなくてえつと何と言つか、
あつそつそつ、このような素晴らしい商品開発のため自らの人生を
十年も費やすとは、尊敬に値します」

「おお、解つてくれるか」老人は両手でガツチリと握手をしてきた。
「口をがない同業者たちのなかには、ゴキブリ取りと聞いただけで
馬鹿にする奴もいるが。まるで主婦がヒマ潰しにする発明みたいだ
な」と

老人の目に殺意が宿り、両手へ物凄い力が込められていく。

「ぎやあ。痛い痛い」俺は悲鳴をあげた。「そんな奴ら、無視すればいいじゃありませんか。あなた様のなさったことは、まさに世のため人のため。害虫駆除の研究は崇高なものですが、間違いありません」

「なんたる心得者」老人は破顔した。両の手から力が抜け、握手したまま俺の腕を上下動させる。「堅物の発明家なんぞより、おぬしの方がはるかに賢いぞ」

「いやあ、それほどでも」俺は首筋を搔きながら苦笑した。
この老人、少し頭がおかしいのかな、と思い始めたのだ。ここまで自分の嘘話に入り込めるのは異常である。詐病の気があるのかも知れない。あるいはボケているのか。

老人は一気にまくしたてる。「まず『ゴキブリ』というものは何の役にも立たん。これは間違いない。利益をもたらすことは皆無。鑑賞にたえるものでもなし。むしろヤツらの存在は我ら人間にとつてマイナスにしか作用せん。食糧ばかりではなく建築材や紙類、はてはインクまで口にする。なかには人間の体にまでかじり付くヤツもいる。寝てる時に耳や鼻などの穴から入つてくることも。まさに、害虫。害虫の最たるものといつても過言ではなかろう」

「ふんふん」と、俺は相槌を打つ。

話しを真剣に聞いているわけではない。リズムを付けてさつさと説明を終らせるためにだ。

案の定、老人は勢いづいて続ける。「そのうえ『ゴキブリ』がどれほど人体に悪影響を及ぼす菌をもつていると思う。これはほとんど無限といつてもよい。なにせ現存するやつだけではなく、新種のバーガンさえも媒体するのじゃからな。これはもう自然発生した細菌兵器がそこらじゅうでウロウロしてゐるのと同じこと。しかもヤツらの生命力は驚異的、水だけで一ヶ月は生き延びるほどじや。恐怖を感じて、しかるべきであるぞ」

「ああ、はい」と、ここで早くも俺はつい生返事をしてしまった。

老人の言つていることがあまりにも大袈裟に過ぎるからだ。

たしかに「ゴキブリは害虫である。健康被害等もあるだろ？」

しかし、細菌兵器はヒドイ。そんな化け物の如き生物がいたら人類滅亡である。

抗えないほどの数のゴキブリがいるのなら話は別だが、そんなことはない。踏み潰せば死んでしまう。終わりである。

この老人に合わせるのは、大変だ。

しかし、いいかげんな受け答えをするべきではなかつた。老人はすぐに突つかかつてくる。

「おぬし」俺をギロリとにらみ付けた。「ワシの言つことを疑つとるな」

「めつそうもございません」俺は激しくかぶりを振つた。「世界的な発明家たるあなた様の言つことを疑うなんて、そんなのあり得ません」

「そうか」老人は冷ややかな眼差しを俺に向ける。「何やらできとうに聞き流された気がしたんじゃが」

「ま、まさか」俺は顔面を引きつらせながらも、なんとか老人の話に興味がある風を装おうとやつきました。「あ、そうだ。ゴキブリだって生き物ですよね。となると、食物連鎖の中にいるのは間違ひありません。それだけで、役に立つていると言えなくはありませんか？」

無理やり質問を試みたもんだから、結果的に反論ぽくなつてしまつた。

しかし、何も言わないのよりはよかつたのだろう。

老人は前の調子に戻つて俺の言を一蹴した。「それは自然界に生息するものに限つてじや。人家に住むゴキブリが、何の役に立つ」「あ、そうですね。それは確かに」俺は納得の表情を作つた。「おつしやる通りで」

「うむ」老人はうなずき、たずねてくる。「そんな害ばかりしかな生き物を、おぬしはどう思う」

「嫌ですね。いにいに越したことはない」

「そうじゃろう」

何がそうじゃろう、だ。ただでさえ嫌らしいゴキブリをさらりと悪く誇張して説明したのである。こう答えるより他にしかたがない。

と、ここまで思考して俺はあることに気が付いた。説明という言葉に触発されたのだが、この老人、商品そのものの説明をまるでしていない。のつけから話しさは本筋を逸れている。

「あのう、すみません」意に添う答えを得られひとり悦に入つてゐる老人へ俺は問いかける。「この商品の方なんですが、市販の物とは違うと」

「おお、すっかり忘れとつた」老人はポンと手を打ち鳴らした。「それはじやなあ、超強力のじや」

「へつ」素頓狂な声をあげて、俺はたたらを踏んだ。「他には、なにもないのですか」

「ない」老人は即答した。

商品の説明だけなら十秒足らずで済んだはず。それを何ゆえこの老人は発明家云々の身の上話をし、「キブリの含蓄まで垂れたのであらうか。この一つは俺にとつてまったく関係のないことだ。

しかも、この一つについて語つたことが商品の説明よりもはるかに長かったのである。無駄な時間の上塗り。腹が立つて、しようがない。

「それだけでは不満か」おそらく感情が顔に出ていたのであらう俺に向かつて老人は言った。「効き目があると」いうのが第一。他は二の次、三の次じゃろうが

「ええ、まあそうですが」俺は頭をボリボリ搔いた。

不遜な態度を老人に注意されそうな気もしたが、せめてそれくらいせずにはいられない。腹立ちは治まりそうにもないし、効き目なんてのもどうでもいいことだ。

「さて、それでは」商品が売れると見当違いしているからであらう、老人はそんな俺にまるで頼着せず大威張りで訊いてくる。「いくつ

必要かな

「ひとつもいりません」俺は商品および名刺を老人に突き返した。不測の事態に、老人の顔が歪んだ。

「今のは、空耳か」名刺の乗っかつた「ゴキブリ取り」を大事そうに抱えながら、空いている方の手で俺の肩をガシッと鷲づかむ。「おぬし、何と言つた」

「だからあ」「俺は強い口調で言つ。「それは、ひとつも購入しません」

「なぜじや。ワシの物言ひが悪かつたのか」俺の肩を揺すぶる。「もしそうなら、謝つてもよいぞ」

「そんなんじやありません」俺は老人の腰に手をやつて、そのまま玄関口へ体を反転させた。「とにかく話は済んだのです。帰つて下さい」

「さては市販の物を使つておるな」外へ押し出されながらも老人はがなり立てる。「そんな物、たいして効果はない。ワシのを使え。ワシの言つことを信じると約束したばかりではないか。」二つの商品の方が強力じや」

「市販の物とか、あなたの物とかいう問題じやありません」俺はさらに老人の背中へぐいぐい力を込める。「つまり、我が家にそんな物は必要ないんです」

「ちよつと待つた。必要ないとは、どういう意味じや」老人はせいいっぱいに俺を振り返つた。その顔にありありと現れているのは不満の色。「ゴキブリが一匹もない訳でもなかろうに」

「まさにその通り、一匹もいないんですよ」俺は平然と見え透いた嘘をついた。

広くはないが一階建ての家である。北海道などの極寒の地ならいざ知らず、「ゴキブリはいて当たり前。

ただ、こうでもしないと老人は帰つてくれそうにもないのだ。
俺は、老人に引導をわたす。

「まさかそんなところに「ゴキブリ取り」を取りつけたりはしませんよ

ね。偉い発明家さんなんですから「偉い発明家、という部分を強調してやつた。

「ううむ」老人は低くうめく。

しぶとくも玄関の上枠を掴みふんばってはいるものの、もはや限界であろう。老人にしては相変わらずの馬鹿力だが、体の半分がたはもはや外に出外れている。

あと、もうひと息だ。俺は老人に体当たりをかましていった。ヒヨイと、老人は身をかわした。

「わっ」転倒寸前である。勢い余つて俺の方が外にまろび出でしまった。

「百歩譲つておぬしの言つことが本当だとしよう」老人は膝に手をついてゼイゼイあえぎながら声を絞り出す。「しかし、これから先もゴキブリが住み着かないとは限らない」

視点を変えての逆襲である。

俺は言葉に詰まった。「うつ。そ、それは」

「ほれ、何も言い返せまい」老人は唇の端をつり上げてニヤリと笑つた。「だから、これを」

商品を差し出した。

「いらないと言つてるじゃありませんか」俺は顔をそむける。「その時になつてから買えばいい」

「買い置きじや」老人は近づいてくる。「これは腐つたりはせんよ。いつまでも持つ」

「いつまでも持つ、ですって」俺は購入する意思のないことを態度で示そつと、後ろ手を組んだ。「それはまた、言い過ぎだ」

「いいや本当じや」老人はその商品を俺の目の前でヒラヒラと振つてみせた。「なんなら検証してみるか。二人で」

とんでもない提案までしてきた。

永遠ではないにしろ未開封のゴキブリ取りなんて何年も持つに決まっている。そんな長い期間、この老人と関係するのは真つ平ごめんだ。

俺は、地団駄を踏んだ。「むちやくちやだ。そんなの受け入れられるわけがない」

「ワシはただ信じてもらいただけ。嘘偽りは、一片もないのじゃからな」老人は自信満々である。「もし商品に欠陥があつた場合、返品すればよい。代金は一円残らず返してやる」

「連絡先が分からないのじや、どうしようもありません」

「ここにすればよい」老人はあの名刺を俺のシャツの胸ポケットに押し込んだ。

確かに電話番号は記載されていた。が、そんなもののデータラメに決まっている。なんの意味もないことおびただしい。

俺は強く横柄な態度へ出ることにした。この老人を持ち上げてもラチがあかない。図に乗るだけだ。ますますア「ギになるのを理解した。

「いいかい、じいさん」眉間へ皺を寄せた。「その商品を購入する義務は、私にはない。いらない物は、いらない」

「ほう。言つてくれるではないか」どうやら俺の態度の豹変を自分の挑戦と受け取つたらしい。老人は上唇をゆっくりと舐め、不敵な面がまえをした。「たしかに義務はない。しかし商品を購入しない理由もない」

「理由だつて」俺は人差し指を老人に突きつけて応酬した。「いるないから購入しない。これが、理由だ」

「それじやあスジが通らん」老人は真っ向から否定する。「おぬしはワシを信用すると言つた。そしてゴキブリは嫌だ、いないに越したことはないとも。それでいてこの商品を購入せんとはどつういう見じや。矛盾ではないか」

なんてことだ。こっちの方がまんまと言質を取られていたのである。

俺はしどろもどろになつた。「それはアレだ、あれあれ」

「それでは商品ご購入じやな」老人は釣り銭の用意なのだろう、懐から財布を取り出した。

「ま、待て。それじゃあ言つてやる」俺は掌で老人のサイフを押さえつけた。「よそで買つことはあつても、あんたから購入する気はないんだよ」

ヤケクソになつての本音暴露である。

しかし、老人は動じない。理詰めで落とす腹を固めたのだらう。淡々と諭すように語りかけてくる。

「なぜ、よそで買つ。ワシから買えば手間が省けるし、なにより効き目に関してはこっちの方が強力なんぢやぞ」

「その効き目じたいも疑わしいんだよ」俺は大声で罵つた。「どこの馬の骨とも分からん人間の説明を真に受けて、たまるもんか」本音暴露の第二段。しかも今度は商品と老人の肩書きのふたつについてだ。

ここまでくればこの老人、気分を害して取り乱すに違ひない。と、俺は思った。

が、老人はなおも平静さを失わない。どどめとばかりに畳みかけてくる。

「なるほど。あたまからずつとワシのことを見つとつたのか。信じてもらいたかつたのじゃが。まあ、しようがないといえば、しようがないのかも知れぬ。しかしワシが嘘をついていると証明は出来ぬはず。すべては本当のことなんぢやから」老人は小鼻をポリポリと搔いた。「もう、いいかげん折れたらどうぢや」

「しつこいしつこい、しつこい」俺は自分の太股をバシバシ叩きまくつた。「警察を呼ぶぞ」

「呼べばいいさ」老人は眉ひとつ動かさない。「ワシも訴えたいことがある。あんたに腰を乱暴に押されて、ひどく痛むんぢや」

「ああ」俺は頭を抱えてうずくまつた。「なんてジジイだ」

ついには声に出してのジジイ呼ばわりである。憎たらしくて、しようがない。

どうしたらこの老人は押し売りを諦めてくれるのだろうか。まず、口では勝てそうもない。体に手をかけたのも悪かつた。

あまつさえ、この老人には恥も外聞もない。そのくせ根気だけはありやがる。押し売りとしては最強だ。

「それじゃあ訊くが」老人の手にある商品を顎でクイッとさした。「そのゴキブリ取り値段はいくらなんだ」

「べらぼうに高額でなければ一つだけ購入してやろうと決断したのである。それでこの不毛なやり取りから解放されれば、ずいぶんとマシだ。当初の意を曲げたってかまわない」

老人はしばらく手に持った商品を眺めてから値段を告げ、こう付け加えた。「しかしそれでは市販の物と大差ない値段じゃから、サービスで一割引きしよう。めでたくもあるし」

「めでたい、だつて」俺は訝しがつた。「いつたいなにが……。孫でも生まれたのか」

「教えてほしいか」老人は真顔になる。「おぬしが購入の意思を示してくれれば、教えてやるぞ」

「ああ買うよ。その商品、買ってやるよ」それほど教えてほしいとも思わなかつたのだが商品が安物と知り、購入することを決めたので、俺は気軽に応じた。「さあ、意思表示は済んだぞ」

「うむ。よろしい」老人は大仰に頷いた。「それはじやなあ、おぬしが商品購入者第一号ということなんじや」

俺はあんぐりと口を開いた。俺の答え如何によつては、めでたくもなんともなかつたのである。どおりで購入の意思表示の方が先だつたわけだ。

そのうえ、今まで商品がひとつも売れていなかつたというのもかなり酷い。方々で断られてきたのは、今日に限つたことではなかつたのか。いつたいこの老人、いつからこんな無益な押し売りなんぞを続けてきたのだろう。

やつぱり買うの、よそがかな。と、俺の頭の中をそんな思いがかすめた。が、またぞろこの老人と押し問答するのは死んでも嫌である。そんな気力、残っちゃいない。

「ひとつ、くれ」俺はポケットの小銭とゴキブリ取りを交換した。

「さあ、もういいだろ？」「

手で邪魔者をおっ払う仕草をする。

「まいどおおきに」老人は関西弁でお辞儀をした。

無礼を働くかれた腹いせか、俺を馬鹿にしているかだろ？。もしかしたら両方かも知れない。

「使用法は箱蓋の裏側に書いてあるぞ。では、ワシはこれで」と、逃げるよう帰っていく。

「まったく、とんだ災難だつたな」老人の姿が門の外に消えてから、俺はひとり愚痴つた。「得体の知れない押し売りに、こんな物を買わされてしまうとは」

購入したばかりのゴキブリ取りを地面へ叩き付けたい衝動に駆られた。

しかし、いくら安物とはいえ金をはたいたことに違いはない。もしこれが不良品だつたらあの老人を見つけしだい責めたてることも出来る。そう考え、俺はぐっと堪えた。

「とりあえず、こいつをセットしてみるか」俺は玄関口から室内へ目をやつた。「どこにするかな。いろいろあって、迷うな」

我が家は一階建て。全部で七部屋。それに加えてトイレが一つと風呂場がひとつ、広めの押し入れもある。

そのすべての場所に、ゴキブリが出る。明らかに一般家庭の倍は出る。老人に言つたのは嘘どころか真逆なのだ。

ゴキブリ取りを切らしていたところでもあり、これひとつじゃぜんぜん足りない。

「うむ。やはり台所にしよう」思案した挙げ句の果てに、俺はそう決めた。

なんせそこは他の部屋の三倍はゴキブリが出る。一般家庭の倍×三である。まるで地獄だ。

「なんで我が家には、こんなにもゴキブリが住みつくんだ。まったく」俺はひとりブツブツ不平をたれながら台所へ直行した。

料理用油が染み込んで黒く変色した床の上に、口の結ばれていな

いゴミ袋が三つ並んでいた。痛んで半分がた溶けてしまつた白菜やらパスタの麺、魚の骨など異臭漂う生ゴミが今にも溢れ落ちそ�である。

調理場に目を移すとそこも似たような有り様。ガスコンロの周りは米粒や調味料が飛び散つており、カウンターの上にも豚肉の乗つたマナ板が放置してあつた。

シンクの三角コーナーも雑多な種類のゴミの体積。

「冷静になつて觀察すると、ヒドイなこじや」俺は嘆息した。「慣れっこになつて気がつかなかつただけか。ゴギブリが住みつく道理だ」

やれやれといった感じで頭を振りながら調理場の下にかがみ込む。そこにも様々な生ゴミが散乱していたが掃除をする気は毛頭ない。それは妻の仕事だ。俺はゴギブリ取りをセットするだけでじゅうぶん。家がこんな状態なのは、妻のせいである。

「悪妻をもらつちまつたな。不潔を当たり前だとでも勘違いしているのか」先程の老人に対する怒りが妻へ移ってしまった。

歯ぎしりしながら箱を開ける。

「蓋の裏側に、いろいろ書いてあるなあ。老人の言つていたのはこれか。なになに念のため本品をセット後はすみやかに遠くへ避難して下さい、だと」俺は声に出して読んでから鼻でふんと笑い飛ばした。「なんのこっちゃ。たかだかゴキブリ取り」ときで。爆弾じゃあるまいし

空き箱を捨て、本体を組み立ててから床に置く。

「これでよしと」俺は両手をパンパンと叩き合わせ、立ち上がつた。「明日の朝までこどのがくらい掛つているのか、楽しみだな」

ぐるりと踵を返す。こどは応接間ではなく一階の自室に戻つてもうひと眠りしよう、そう思ったのである。

が、踏み出してまだ畠ぶらりんになつてゐる足の裏を一匹のゴキブリが走り抜け、俺はあやうく尻餅をつきかけた。

振り返つてみると、そのゴキブリはあの例の商品に突つ込んでい

1

「なつ、なんだ。今、仕掛けたばかりだぞ」俺は上擦った声で言つ。

「そうだ、偶然だ。ただの偶然だ」

自分自身を納得させ、ふたたび台所の出入り口へと顔を向ける。

さあさあさあさあさあさあさあ

台所の出入り口のみならず天井や床の隙間等、あらゆる所から黒い物体、つまりは「キブリ」がわらわらと這い出してきてはいるではな
いか。

これは悪夢が絶えなかった。他の二三の力士の重きに目を合はれ

よえええええ「

後にもニギアリの大群たつたのである。しかもそのすべてのニギアリがあの列の商品こ突進して行く。

「老人が言つていた通り、商品は強占

よつて咳いた。「しかし、りやあ、あんまりだ。いくらなんでも、まさか我が家にこれほどゴキブリが住みついていたとは想像の範囲外だ」

俺はその光景を啞然と眺めた。

あきれたことに、商品へ入りきれないゴキブリたちは外紙にかじ

りついで次々と同類の上へと折り重なっていく。

だ
「

ゴキブリで溢れ返つた床のわずかな安全地帯を見つけては爪先立ちで玄関を目指す。背筋が凍るような悪感と激烈な嘔吐感に堪えながらもなんとかそこへ辿りつき、傘立てから傘を一本取りあげた。カーテンの開けられた窓ガラス越しに曇り空が広がっていたからだ。

玄関のドアを開ける。

「ひとつ」いつしゅん、
氣を失いかけた。

辺り一帯のゴキブリが黒波となつて我が家へ押し寄せてきているではないか。

「くそ。いくら我が家にゴキブリがたくさん住み着いていとしても、あんなにヒドイわけはなかつたんだ。外のゴキブリまで、わざわざ誘き寄せていやがる」俺は体勢を崩し前に一步つんのめつた。何匹かのゴキブリがぶちゅと、音を立てて靴の下で潰れた。

「それにしてもあの老人はいつたい何者だつたんだ。状況から判断すると、言葉に嘘はなかつたのかも知れない。だとしたら、なぜ世界的な発明家が押し売りなんかを……。あつ」膝をパシリと叩く。

「金を儲ける以外にも、実験の意味があつたんだな。我が家はそれになつちまつたつてことか」

俺はこの推測が間違いないことを確信した。

そして、今まで雨雲だとばかり思つていたものの正体を知つて驚愕した。それは空一面をびっしりと覆いつくしたゴキブリだったのである。

やがて、そのゴキブリの大群は地表を日がけ下降を始めた。

「もう、おしまいだ」俺は諦めの境地に至り、傘を放り投げた。あの老人があれからどこへ行つたのかは分からぬが、ついさつき別れたばかりである。そう遠くへは行けてまい。あの老人も、道づれだ。

それはあの老人の犯したミスであり、まさに自業自得。みずからの発明品がこれほどまでに強力だとは、作った本人にも予測できなかつたことだろう。

もはや、この国は人間の住めるところではなくなつてしまつたのだ。

空から放射能雨の如く降りそそぐ無数のゴキブリ。　その中に、俺は見てしまつたのである。

明らかに、日本には生息しないもの達の姿までもを。

-
了
-

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1256c/>

やってきたもの

2010年10月8日15時06分発行